大阪公立大学
Osaka Metropolitan University
学術情報リポジトリ

2006年度国際交流事業報告

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2010-07-01 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10466/10118

2006年度　国際交流事業報告

2006年度からの新しい企画は、海外の大学女性学研究センターとの交流、ネットワーク作りである。初年度である今年度はイタリアとカナダのいくつかの大学の女性学研究センターを訪問し、交流活動を行った。なお、昨年度概算要求時の予定は2008年度までの３ヵ年計画であったが、その後にセンターの中百舌鳥キャンパスへの移転が急に決定し、2007年度の学術情報センターの１室を使用させてもらう仮住まいを経て、2008年度に完成予定の総合教育研究機構棟1階に新しい女性学研究センターのスペースが用意される運びとなった。そのため来年度の仮住まい、および２度にわたる移転を考慮して、国際シンポジウムは新しい機構棟に女性学研究センターが落ち着くことになる2008年度に開催することに、予定を変更し、報告書作成を含めて2009年度までの4ヵ年計画へと予定を改め、2007年度は海外女性学研究センターの訪問活動を続行することとなった。

カナダ出張：日程：2006年12月２日～12月10日
熊安貴美江（共同研究員）
木村涼子（学外研究員・科研調査の出張時に参加）
訪問先：トロント（カナダ）２大学の女性学およびフェミニスト研究センター訪問
〈トロント大学〉教育における女性学研究センター（Centre for Women's Studies in Education）（カナダ）を訪問し、前主任のPaula Bourne氏、 現主任のAngela Miles氏と面談。
〈ヨーク大学〉 フェミニストリサーチセンター（Centre for Feminist Research）（カナダ）主任、Vijay Agnew氏と面談。

本学女性学研究センターの活動内容について報告するとともに、両大学におけるセンターの年次活動や財政状況、大学内部の女性学・フェミニスト研究センターとしての位置づけ、存在意義と近年の活動の成果、今後の活動の展望など、多岐にわたって情報を共有した。また、今後のセンター

間での国際交流活動について打診し、その見通しについて意見交換した。

トロント大学の教育における女性学研究センターでは、人権教育国際研究所との共催企画である来年度のイベント、『女性の人権：グローバリゼーションの時代における平和な世界の建設』についても情報提供いただいた。女性の人権を世界的に認めていく画期的な契機となった憲章や法律などを題材にしながら、それらの獲得にいたるまでの歴史的闘争、社会的変化をもたらす資源としての可能性、またそれらを教育と実践の場で活用していくための効果的な方策などを検討する、3週間近くにわたる内容の濃いイベントとなっており、センターが内外の関係機関や活動家と密接に連携を取りながら精力的に活動を展開している様子がうかがえた。

ヨーク大学のフェミニストリサーチセンターは、現在学内での移転期間中であり、重ねて主任であるビジェイさんが現在サバティカル期間中のため、学外のダウンタウンでの面談となった。ビジェイさんはカナダで大学院を終了後ずっとトロントに在住しているインド出身の有色人女性である。こちらのセンターに関しては、有色人女性がこのポジションについたことで、彼女の在職中の5年間に大学内にマイノリティ女性のコミュニティを形成できたとの、貴重なお話をうかがうことができた。また、学内外の研究者を招いて、カナダの多文化状況を踏まえた研究シンポジウムなどを積極的におこなってきたことをうかがった。

両センターとの今後の具体的な交流活動予定についてはまだ流動的であるが、まずは相互の情報を共有しあい、建設的かつ継続的な交流を推進していこうとの合意を得た。

イタリア出張：11月24日～12月2日

伊田久美子（主任・科研調査のための出張機会を利用しての訪問）

訪問先：トリノ大学女性学研究学際センター（Centro Interdisciplinare delle Ricerche degli Studi delle donne）

：ミラノ・ビコッカ大学ジェンダー研究国際ネットワーク（International Network of Gender Studies）

トリノ大学女性学研究学際センターは文系棟に資料室とセミナー室を有し、学内の教員が理事、所長、研究員として運営していく、私たちのセンターによく似たスタイルの機関である。センターの立ち上げは1995年で、著名な家族社会学者、キアラ・サラチェーノさんが尽力して設立された。現在の理事でご専門はドイツ文学のアンナ・キァルローニさん、所長で家族社会学者のフランカ・バルサモさん、著名な科学史家で、初期メンバーとして活躍されたエリザベッタ・ドニーニさん、共同研究員のイタリア文学者、ルイーザ・リカルドーネさんの４人、およびセンターの活動を支える若い研究生、院生の方々と懇談した。このセンターはエスプリに富むたいへん美しい充実したホームページを運営しており、そこでは市民向けの公開授業をオンラインで受講するシステムも備わっている。ITに疎い（笑）指導者たちを、若い志のある優秀な研究生、院生らが支えている。残念ながら英語バージョンはまだこれからの課題である。

上記のオンライン講座に加えて、夏期公開講座、研究セミナーなどを開催している。また毎年学内のすべての学部に関するジェンダー、女性学関連授業を紹介するパンフレットを作成し、学生に提供している。大学院でジェンダー、女性学関連の研究を行い論文を書く院生を援助し、すぐれた論文を選抜して出版するシステムを確立している。

現在の指導層は学生時代に70年代フェミニズム運動に参加した世代に属し、当時の問題意識と経験を教育研究に反映させていく努力を重ねてきた。このセンターが掲げる「学際」というスローガンは、彼女ら自身がさまざまな分野に属しながら、分野を超えて学びあうことを大切にしてきたことを示している。古い起源をもつイタリアの大学の例にもれず、大学施設は市内と郊外に点々と拡散している。そのような環境の中で、センターは貴重な出会いと交流の場としても機能している。学内外にかかえる諸課題は私たちのセンターと共通のものが多く、今後とも交流を継続していくことで一致した。

ミラノ・ビコッカ大学は90年代後半に設立された、新しい国立大学である。ミラノ大学の学生の急増と新しい研究分野に対応するため、ミラノ郊外ビコッカに大学都市が建設されたのである。その雰囲気は筑波大学に共

通するものがあるが、市内との交通は意外に便利である。社会学部にあるジェンダー研究国際ネットワークを訪問し、代表のマリーナ・カッローニさん、機会均等委員会担当のカルメン・レッカルディさんと懇談した。またネットワークによる研究会で私たちの女性学研究センターの紹介と近年の日本における女性政策の動向を、とくにバックラッシュを中心にお話しし、学生、院生や若い研究者と懇談することができた。日本の右傾化傾向に対する知識と関心は予想以上に高く、日本の政治的動向が国際的に与える影響の大きさをあらためて認識した。イタリアでは90年代にEUのジェンダー主流化政策により、国内政策の見直しを迫られ、各大学に機会均等委員会を設置し、担当教員を配置することとなった。少子化やGEMの相対的低さなど、イタリアと日本には共通点が多い。「外圧」により政策がすすんだところも、日本とよく似ている。

いずれの機関も設立と活動の中心となっているのは、70年代フェミニズム運動を担った世代である。このところイタリア各地で70年代のフェミニズム運動資料を整理保存する活動が行われ、成果をあげているが、ミラノではそうした文書館のひとつで、19世紀から存続している「女性連合」の資料館を見学することもできた。

11月26日はイタリア全国で女性に対する暴力に反対する取り組みが行われ、各地で集会やデモ行進が行われた。70年代以来のアクティヴィスト、研究者、地方自治体が協力しての取り組みに、普段は散々もめながら、いざというときにちゃんと足並みが揃う、イタリアの大衆運動の「伝統」が健在であることを確信した。

いずれの機関とも今後の交流継続で一致した。2008年度シンポジウムを含めて交流事業の発展に向けて来年度以降の活動をすすめたい。